
Hideaway

三沢 馬太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

H i d e a w a y

【Nコード】

N 8 3 1 1 Q

【作者名】

三沢 馬太郎

【あらすじ】

職場での苦闘。プリンタからの謎のメッセージは何を意味するのか……

経理部の優子さんは、素敵な人だ。本当に素敵な女性だ。

土田裕輔は、経理部の野宮優子の美貌を目にする度にため息を吐く。

総務部に入ってまだ3年目の裕輔より10歳も年上ではあるが、優子はいつまでも若々しいままである。世間では“オバサン”と呼ばれてもおかしくない年齢ではありながら、常に新入社員同様の瑞々しさがあり、しかもそれは若さゆえの未熟な姦しさとは一切無縁の、楚々とした落ち着きを持ったものである。一種諦念の境地にも似た、年齢を超越した凜とした立ち居振る舞いは、奥床しささえ感じさせるが、かと言って茶道の家元のような堅苦しさはこれまた一切無く、気さくである意味あっけらかんとした自然な物腰も、裕輔を惹きつける大きな魅力となっていた。

年上好みの裕輔にとって、彼女は正に理想の女性であったが、噂だと、どうやら現在、付き合っている特定の男性も居ないらしい。

優子はたまに出入金内容の確認のために裕輔の総務部へ降りて来る以外は、上階の経理部に籠もったままなので、週に2〜3度、顔を合わせるかどうかというところ。

入社後直ぐは仕事も忙しく、総務部へ出入りする内外の人間に気を払うことなど到底できもしなかったのだが、入社後少し経ち余裕が出て来た頃から次第に彼女を意識し始め、今では彼女がその小柄ながら引き締まった姿を見せる度にパソコンに向かいつつも独りドキドキ胸高鳴らす体たらく。

彼女は彼女で全く涼やかなもので、裕輔はもちろんのこと男性には全く興味を示さぬ体で、いつも端的に用件のみを伝え、用が済むと無駄口など叩かずさっさと踵を返してしまう。しかし冷たいという印象では決してなく、まれに課長などが叩く軽口にも素直な笑み（これがまた、切れ長の涼しげな目の中に少女のような面影を残

していて、裕輔を虜にするのだが」と端的な返事で愛想を返す。

「経理部の野宮さんて、誰とも付き合っていないんですって？ それ本当っすかね？」

一度、直属の先輩でもあり主任でもある鈴木健太郎に興味津々で訊いたことがある。

「ああ：実はおれも、一度だけ、彼女に興味を持って一緒に食事をしたことがあるんだが、結婚相手はおろか、付き合ってる奴もいないらしいぜ」昼飯のカレーを頬張りながら、鈴木は言った。

「鈴木さんも狙ってたんですか！？」

「まあ：な：お前が入社する少し前だった。おれ、ホラ、今の奥さんと結婚して子供いるだろ？ 子供が大好きで結婚したってのもあるんだけど、野宮さんは『あたし、子供はいらない』って言ってさ：それでおれは、パスした訳」鈴木はそのいかつい風貌に似合わず社内でも有名な子煩悩である。年齢も、野宮優子とほぼ同じだ。

「何だ？ お前、野宮さん狙いか：！？ 何なら手伝ってやってもいいけど：女にうつつ抜かす前に、もっと要領よく仕事する方法を覚えろよ」鈴木は苦笑いしてスプーンを裕輔に向けた。「お前、ただでさえトロいんだから」

「いや、別に狙ってるなんてもんじゃないすけど：」

「これは、ほんの些細ではあるが、チャンスが存在している証なのかもしれない：。」

裕輔は、その後仕事中也ずっとそんなことを考え続けていたため、いつにも増してリストの入力漏れや領収書の記入ミス、電話の応対ミスが目立ち、鈴木や同僚に2度、叱られた。

「土田クうーン！ ちょっと、いい？」

社内で“スネオ”と仇名される、裕輔の上司、庶務課長の住吉光行が神経質そうな細い目を、よく磨かれ染み一つ無い縁無しメガネの奥から裕輔に向けて机に座りながら手招きをしている。薄い唇はいやらしい笑みで歪んでいるが、目は決して笑っていない。何か小

言のある時のサインだ。

「ハ、ハイっす…」不意の呼び出しに、エクセルをいじっていた手を止め、裕輔は恐る恐る席を立った。「何でしょうか…?」

「土田クンさゝあ…」裕輔が以前提出した報告書に目を落としたまま、住吉は空いた手の中指でメガネをずり上げた。「これ…ちゃんと見直した…?」そう言って朱筆のたっぷり入った報告書を裕輔に向けた。

「ハイ、は、一応…は…見直した積もりなんですが…」

「『一応』うゝ!?!?」

フロアにいた、総務部の人間皆が笑っている。いつも人を小馬鹿にしたような態度の同僚の矢作や、わがままなで生意気な後輩の山本聡子、普段はもの静かな、システム管理課の岡山さんまで、パソコンに向かう振りをしつつ、声を押し殺して笑っているのが分かる。

「な、何か…」

住吉は紫色の唇を更に歪め、報告書の数字を指し示し、叩いた。「いろいろ言いたいことはあるんだけどさ、特にこれ、この部分よ。

先月の設備経費報告書であんた、NT通信社との高速ケーブル契約で、通信費欄には『二十万五千六百七十円…前月比二十五%減』、って書いてあったよね」

「ハア…」

「でも、何これ。今回の報告書じゃ、全く同じ月の記録なのに、通信費の数字、上がってるじゃないの」

―しまった。裕輔の脳裏に、先月の報告書に記載した通信費欄にミスがあることを、書類提出後に発見したことが思い出されてきた。記載ミス発見時は、既に提出後だったため、後日数字上の帳尻を合わせることでミスを隠蔽しようとしたのだったが、今回の報告書提出時に、うっかりそれを忘れ、馬鹿なことに、今度は正しい数字をそのまま記載していたのだった。

「ハア、その…つまり後で、分かったことでして…いずれ申し上げようかと思っていたら今になってしまい…」ぶわっ、こめかみと額

に汗が噴き出し、耳にも血が昇るのが分かる。

「ハァー！」神経の細かさでは社内一と言われる住吉は大仰にメガネを外し、瞼を片手で覆った。「何でこうしたミスをするんだろうねえ…情けない…」

「ス、ス、済みません。こんなミスがないよう今後は…」衆人の晒し者になっている気がして、裕輔は居たたまれなくなった。

「『済みません』て…ねえあんた、これ、自分で気づいたのはいつ頃？」

「え！？…と…」もう追求は勘弁してくれ…胃がキュツと縮む。「一ヶ月位前でしたか…」

「『位前』って…、まさか忘れたの？ んもう、自分で作ったものの責任も取れないの？ あんたは」住吉はフロアを見渡す。「誰か、ああ、そう、山本さん？ 土田クンをその時手伝ったのって、あなただったよね？ 君、気づかなかったの？」

「指摘しましたよ。えと…確か、9月の15日頃だったと思います」住吉同様、小賢しい女狐のような目をした山本聡子は、必要以上に神妙な様子で言った。「私が『ここの経費額、数が合わないんですけど、課長に言っておきましようか？』って訊いたら、確か土田さん、『いいよ、いい、いい。大丈夫だから』っておっしゃってたから…」

―こ、コノ野郎、お前があの時、凄く嫌そうな顔しながら訊いてきたから、おれは後で帳尻を合わせようとしたのに…。それを…後輩の立場でありながら、こんな場で暴露しやがって。

「なに！」住吉はわざと飛び上がる振りをした。「じゃ、土田クン、その時、何故私に言わなかったの？」

「いえ、言おうとしたんですが…」

「『言おうとした』…んで、どうしてそれが、実行されなかったのかなあ…」

「それは…」報告して叱られるのが億劫だったからに決まってるじゃないか。分かっている癖に、その答えを口から引き出そうとする

このいやらしさ。

「『それは』：？」唇を突き出し更に目を剥く住吉。

「そ、それは…」後輩たちの軽蔑の視線が背中に突き刺さり、もう、居ても立ってもいられない。

「その時、私に言うのを躊躇させた、何かがあったの？」

「ま、まあ、その…」正に穴があったら入りたい心境で、ひたすら頭を下げる。「済みませんっ。済みませんっ」

「『済みません』じゃ、分かんないんだよねえ…。何でも『済みません』じゃ、何も片付かないよ…」

万事がこんな調子だった。席に戻った裕輔は、ぐったりしながら「いつ辞めようか」と考える。けれども辞めても特別なスキルがある訳でも貯金がある訳でもなく、とうてい生活できないことを考えると、暗澹たる気持ちになる。向かいの山本聡子は何食わぬ顔でパソコンを叩いている。電話が鳴っても、仕事に没頭している振りをしているのか、先輩の裕輔に取らせようとする。矢作も、こうした裕輔の失態に飽きたのか呆れているのか、ねぎらいの言葉も何もない。裕輔一人が宙に浮いた感じで、ポカんとデスクに取り残されている。

そんな時、裕輔の思考は痺れたようになり、周囲の環境が非現実的なもの思われてくる。

一いつたいおれは、ここで何をしているのか…？

「イヤだあゝ、また出ちゃった」

山田聡子が毒づく。

「何が？」恵子の方を見ると、彼女はプリンタから訳の分からない文字の羅列が印刷されたA4用紙を取り出していた。

「さつき、プリンタが紙詰まり起こしたんです。それで無理やり電源消して再起動したら、印刷コマンドをかけてもいないのに、勝手に訳の分からない文字をプリントし始めて…」

「ああ、『宇宙からのメッセージ』か」矢作が、不気味にヒヒヒと

笑っている。「たまにあるよな。プリンタに無理させるとき」
「どれ…」見ると、確かに訳の分からない文字や記号の羅列。

*X||`XX\*※\|@; \|タ+\$タ? ||`ニニタタ/|
>>||タ..タ? x x |> x 二? |> 二二
*※, ~`※# 二 X..タ | タ> || タ X 二 | .. /

コンピュータやプリンタが何かを伝えたがっているのか、それとも矢作の言うように宇宙からの、何者からかの電波をプリンタが偶然拾って印刷したのか。その脈絡のない、しかし時折入る「!」のマーク等からは、何者かの強い、切羽詰った意思のようなものさえ感じられ、裕輔にはやや不気味に思えた。

「あら、まだ出てくる。イヤだ、本当に。全然止まらない。」

結局、紙は延々排出され続け、さすがに焦った矢作たちがコンピユータを強制修了するまで続いた。

最初、不気味に思ったものの、その文面に何か意図的なものを感じたのと、その切迫感に妙なりアリティーと親近感を覚えたため、裕輔は紙を処分する手を一旦止め、そのうち数枚を畳んでポケットに収めた。

独り暮らしのアパートに帰り、メッセージの紙を畳いっぱいに広げてみる。

「ふむふむ…」眺めれば眺めるほど、その文字の羅列には強烈なメッセージが内在するのではないかとの思いに囚われてくる。

ふと、裕輔は学生時代に暇にあかせて読んだ暗号の本を思い出した。そこに出ている暗号の一種で、確かこんな形状のものがあつたっけ。

裕輔は、ペンを取り出し、その脈絡のない記号と文字の列に印を付けながら、徒然なるままに意味と脈絡を見つけようと試みる。テレビも付けず夕飯も食わずに没頭する間に、裕輔はその記号と文字

の海に変な安心感を覚えてきた。気づけばそのプリントは裕輔の書き込みで溢れ、裕輔もいつしか、その奇怪なプリントの海の中で寝ていた。

翌朝。

眠い目をこすり、欠伸をこらえつつビルの入り口でエレベーターを待つ間、チラと隣に目をやった瞬間、そこに立つ野宮優子を見て、裕輔の眠気は吹き飛んだ。

「の、野宮さん!？」

「あ、…総務部の…土…」目をきらりと開いて、澁刺と嬉しそうに返す笑みには、作為的なものは微塵も混じってはいなかった。「おはようございます」手にはドトールのホット用カップを持っている。エレベーター内に、コーヒーではない、ミルク・ティーらしき匂いが微かに漂う。

「土田です」正確にはなかったが、「土」一文字だけでも覚えていてもらえた感激が先行し、裕輔の声も大きくなった。「おはようございます…初めてですね…ここで朝、会うの」

「ええ…そうですね」優子はちよつとはにかんだように言うと、目を伏せてしまった。

その様子がまた愛らしく、裕輔は朝から興奮する。

「あの…あの…そちらの部署の調子は、どうですか…?忙しいんですか…?」

「ええ…今はまだ秋だから、そうでもないですよ。でもやっぱり、立て続けに細かい仕事が入ってくるもんだから…でも、土田さんや鈴木さんの総務部なんて、それこそ年中、って感じじゃないですか。それに較べたらわたしたちなんて…」

エレベーターが止まった。裕輔の総務部の4階に着いたのだ。

「ええ。ありがとうございます。頑張ります、こっちも」降り際、裕輔は言った。

「頑張ってくださいね」

指輪の無い左手を振りながら、優子の笑みは最後まで明るかった。そしてやや厚い唇から覗く八重歯の白さが、いつまでも裕輔の目に焼きついて離れなかった。

「野宮さんが、おれに「頑張つて」と声を掛けてくれた…しかも、名前を（一部だけだが）覚えていてくれた…」

裕輔がデスクで夢見心地でぼんやりしていると、後ろに人影があった。

振り向けば、白髪のいかつい顔の、仕立ての良いスーツを着た男性が立っている。

「ひ。しゃ、社長！」慌てて立ち上がる裕輔。弾みでキャスター付きの椅子を後ろに倒してしまった。

課長の住吉や鈴木、矢作も一斉に立ち上がる。

「社長！」

「社長！」住吉が、もの凄い作り笑いを浮かべて擦り寄ってきた。

「お越しなら、おっしゃっていただければお迎えにあがりましたのに…！」

「いや、いい。それより何だ、キミの課は、若手を野放図に、昼間から机に突っ伏してるだけで良しとしてるのか？」ギロリ、社長は住吉を、それから裕輔を睨眼つけた。

「め、めめ滅相もございません！ ははあゝ！ 私の、私の不徳の致すところ、どうか、どうかご勘弁を」顔を真っ赤にして、住吉は血走った眼で裕輔を睨んだ。「おい、土田クン、キミももう3年目だ、手が空いたなら空いたで、何をすればいいか、自ずと分かってくるても良い頃じゃないのか！？」

「はあ…」言い訳する気も起きず、両手を股間で合わせ、裕輔はひたすら社長に頭を下げ続けた。「すみません、すみません…」

「我が社も決して大きいとは言えない会社だ。この不況の荒波を乗り切るためには、与えられた仕事のみを漫然とこなすのではなく、自分から会社全体の将来のビジョンを描き出し、それに向けて自分

のできることを始めてゆくような自発的な人材が必要なんだ」

「ははあゝ！ 全く、全くおっしゃるとおり！」住吉は、いま一度雄介へ、怒りと哀れみのこもった目を向けた。「ホラ、土田クン、分かったよね！？ 以後、気をつけるように！」そう言いつつも、住吉や部長は既に裕輔を、自分たちチームの有能な歯車としては見てはいない。

健太郎や矢作が大声で笑う。聡子も肩を震わせている。いつもは大人しくパソコンに向かうだけの管理課の岡山さんさえも、クスクス笑っている。

そこへ、優子が伝票片手に入ってきた。「あのゝ、先月分の消耗品代の件でお伺いしたいのですが…」そこで、場の異様な空気にはたと立ちすくむ。

「分かったね！？ 土田クン」まだ住吉の説教は続く。優子は裕輔を見た。

「ハ。以後、もう、いやもっと積極的に業務に邁進すべく頑張ったく…」ああ：優子さん：何て時に…。頭が火照り、胃が痛くなかった。情けなさ過ぎて、何だかここで謝っているのが自分ではないようにさえ感じてくる。逃避機制。

「気をつけてもらいたいね…」社長は今一度、裕輔へ一瞥をくれると住吉に切り出した「ところで来週、鴻之池商事の資材部のお偉方が来る。ホラ、うちも、2年前の再生紙ノートのパルプ素材では、何やかやとお世話になったろう…」

「ハ！」住吉の眼が不気味に光る。

「その時のために、私の以前、書いた資料を探して冊子の形にしておいて欲しいんだ。何、全く大した用事じゃなかったんだが…」

「確か『日本のノート文具の明日』という題でしたね…」

「良く分かってるじゃないか！ じゃ、その時までに頼むよ」振り返り、優子に気づいた社長は途端に相好を崩した。「や、野宮クン！ 相変わらず、キミは、いつまで経っても若くて可愛いね」

「そんな…オバサンに向かって『可愛い』なんて、逆にセクハラで

す…」あの八重歯を見せて、眼を輝かせて屈託無く微笑んでみせる優子。

「いやっはっあゝ、まさか！ 本気で言ってるんだよ、私あ。いつまで経っても美しいよ、キミは。今度また、昼食でも行こうか」
「ありがとうございます…」

優子が去った後も、裕輔にロクな仕事は回って来ず、彼は急流のように忙しく立ち居振舞う職員たちの流れの中、朽ちかけた杭のごとくポツネンとパソコンをいじるのみ。

その夜、再びあのプリントを眺めていると、大学の友人、香川から電話が掛かってきた。

「おう、調子はどうだ!?」 相変わらずぞんざいな口しか叩けぬ香川は、その尊大ぶりだけあって、総合商社の海外営業マンとしてバリバリやっている。

「相変わらずだ。詰まらないデスクワークで、気が狂いそうだよ」

「ハハ：お前が『自分の性に合ってるから』って選んだんだろ。所詮仕事なんて、そんなもんだろ。何にもストレスのない仕事なんてある訳ないんだから。この世は、お互い、何らかの嫌なことを引き受けないと成り立って行かん訳よ」

「そうだけど：」 自分の場合、ストレスだらけだ。

「まさか、『辞めたい』なんて言い出すんじゃないだろうな」

「ま、まさか：お前らみんなが頑張ってるのに：」 本当はすぐのど元まで「辞めたい」という言葉が出かかっていたが、裕輔はグツと堪えた。また胃が縮む思いがした。

「ところで：今日は、そもそも何の用で：？」

「ああ：実は：」 香川は、急に声を落とした。

卒業後、フリーでバンド活動をしていた共通の友人が、病死したというのだ。香川は通夜とその後の友人有志のみの追悼の集まりの日程だけを知らせ、電話を切った。まだ20代も半ばの人間を襲った悲劇に、裕輔は言葉が出なかった。

電話を切った後も、しばらく暗澹たる思いに沈んでいた裕輔は、思い直したようにプリントに目を落とす。

； #〒X…！@6タ9 | 7>8 || 20タX | …／

ふと、あることに気づいた。

―数字がひとつおきに並んでいる。

数字が突如、輝きを以て彼の目に映じた。彼はすばやく数字をアルファベットに置き換える。何故だか分からない。しかし、昔からあるスパイ映画や探偵モノでは余りにもお馴染みの常套暗号だったから、単純な裕輔の頭にもすぐに浮かんできたのかもしれない。

―6はアルファベットの順番で言えばF。そう考えて行くと、9はI。7はG。8はH。その後の20は：T。：「FIGHT」！

おお、何だこれは。「頑張れ」…！？ まさかおれへのメッセージ…？

裕輔は突如興奮し、文字に浮かぶ数字を赤ペンで囲ってゆく。夜も更ける頃、プリントは血塗られたように真っ赤に塗りつぶされていた。

「頑張って」裕輔の元にそんなメールが届いたのは、それから2、3日経ってからだった。

庶務課員一人一人のノート・パソコンには会社内での個人用アドレスが、当然割り振られている。裕輔個人のアドレスにある朝入っていたメールには、件名に「頑張って」そう書いてあるだけで、本文は空だった。差出人の名前は「milktea」。アカウントにもmilktea、その後にはhotmailの、ありきたりなドメインがくっついてるだけ。

裕輔は、ドキドキした。

昨日、優子がまたフロアに降りてきた時の様子がありありと目に浮かんだ。

―あの時、確かにちよつとだけ目が合った…。

更に、以前エレベーターで出会った時の、彼女が持っていたカップ

から漂う仄かな紅茶の香りがよみがえってくる。「Milk tea」…。

鼻の下を伸ばしながら、営業部で出たダンボールの空き箱を処分しに、ビル地下のゴミ捨て場へ向かう。上の空でダンボールを畳んで置いていると、背後でガチャン、重い鉄のドアが閉まる音がした。真っ暗になる室内。鍵まで掛かる音がする。掃除係のおばちゃんが閉めてしまったのだ。

「お、お、おい、ちょっと待て…」慌ててドアを叩くも、既におばちゃんたちの姦しい笑い声は、遙か彼方に認められるのみ。

「まじかよ…」ため息を吐き、ポケットをまさぐる。携帯は、机の上に置いてきたようだ。「職場に戻れないじゃないか…どうすんだよ…」

ドアに背をあずけて目を凝らす。何も見えない。本当に漆黒の闇。かすかに生ゴミのすえた匂いが漂う。小さい頃に読んだ『おしおれのぼうけん』という絵本に出てきた、ネズミばあさんという妖女が、裕輔の頭によみがえる。

―考えてみれば、こんな都心のビルの地下なんて、ドブネズミの格好の棲家だな…。

不意に、丸々と太ったドブネズミの姿とその鋭い歯、光る眼が思い起こされる。それら獰猛なドブネズミを指揮するのは、魔女のような黒衣をまとったネズミばあさん…。

ふと、ビニールの擦れ合う音がした気がした。

カサ…。

―嘘だろ。こんなにタイミングよく、出てくる訳ないよな。ゴキブリか…？ いや、空気の流れか何かの加減だろう…？

再びカサ…音がする。

―おいおい…。まさか…。

裕輔の心に恐慌が走った瞬間、「バカ」耳元で、しわがれた女性の声が聞こえた気がした。

「ひ、ひい！」明らかに、耳元に感じたその声。背筋が凍りつき、

裕輔は、必死に叫んだ。「た、助けて！ 出して！ 出してよ！」
ガンガン扉を叩く。

背後に、いや、もっと身近に誰かがいる気がして、裕輔は脂汗を全身にかいて、それこそ死にもの狂いでドアを叩き続けた。

「いやだ！ 出してよお！」

「ぶわっかもーん！！」

裕輔が搾り出した声を更に増幅したような声で、部長が怒鳴った。
へとへとになった裕輔の心臓は、追い討ちをかけられるようにびくり、躍り上がる。

「そもそも、ゴミ捨て場に閉じ込められるなど、それだけでも情けないっていうのに、女々しく、いや取り乱して泣き叫ぶとは何事なんだ！？」相撲部出身の部長は、細い目をますます細くしてぶつと声を荒げた。

「しかも：携帯まで机に置いてきて：」課長も、もはや哀れみ以外の何ものでもない含み笑いをし、部長の後を継ぐ。「あなた、本当に、運が悪いというか何と言うか……」

他の課員たちを始めとするフロアの社員の間にも、呆れ返っているせいか、笑いも一切ない。しらせ切っているといった感が強い。

岡山さん

「とにかく、今日はもう、疲れてるだろうし、何も進まんだろうから、帰って良し」

「|| 帰れ」。正直、ゴミ捨ての“お使い”さえもまともに出来ぬ社員を持て余している様子で、部長は裕輔の顔さえも見ずに、決済書類に目を通し始めた。

時計を見ると、既に4時を過ぎている。

矢作、聡子、鈴木らの冷ややかな空気の中、青白い顔で帰り支度をしながら、裕輔はふと、皆の頭越しに外を見た。午前中はあんなに晴れていた空が、鉛色の雲で低く垂れ込めている。今にも雨が降り出しそうだ。裕輔の頭の中に、何故だか中学の時に理科で習った

ことが思い起こされた。

— cumulonimbus 積乱雲。あの中は、不安定な荷電粒子でいっぱいなんだって先生が言ってたっけな。だからすぐ雨が降るって。ゆらゆら浮遊する荷電粒子の嵐、か…。

裕輔の頭には、暗黒の中、夜光虫や人霊のように無数の電子が遊泳する像がまざまざと浮かんでいた。

駅までの帰り道、案の定、大粒の雨が降り出した。

傘を持たなかった自分の愚かさにもはや絶望感さえ抱きつつ、裕輔は駅までの繁華街にあるスタバに慌てて立ち寄った。

言い訳のようにカフェ・ラテを注文し、裕輔が往来に面した席を見ると、優子がいた。

「あ…」彼女も裕輔に気づいた様子で、いつものように屈託のない笑みで、ちょこんと、手を上げる。「こんにちは。お疲れさまです」

「お、お疲れさます」高鳴る鼓動。顔や指先へと、体中の血液が再び活発に環流し始め、裕輔自身にも、ようやく生気が戻った気がした。裕輔は雨だれに直面するように座る優子に歩み寄る。「となり…いいですか」

どうぞ、八重歯を覗かせ、上品に薄くシャドーをひいた垂れ目がちの目をほころばせながら、優子は小さなカバンをどけ、隣の席を勧めてくれた。

甘いメイプル・シロップの香りに目を落とすと、小さな両掌にはミルク・ティーの白いカップが包まれている。角ばった銀の指輪が、右手の薬指にのみ嵌められていた。

「やはり…間違いない。彼女は、ミルク・ティーが好きなんだ。」

「今日は…どうしたんですか？」自分のことは棚に上げ、裕輔は早速優子に質問を投げかける。

「え？」振り返る優子。茶色くて繊細な髪が、すぐそこにある。裕輔の耳に血が昇る。

「いや、その…いつも、こんなに早いんですか？」

「今日はちょっと体調悪くて、早引けしちゃった」

「野宮さんでも、そんなこと、あるんですねえ…」 妙に感心する裕輔。

「ありますよぉ、そりゃ」この笑い。何て作為の無い、素直な笑いだろう。いつも裕輔は惚れ惚れする。少女の無垢な笑いでは決してない。しかし、達観しても居ず、強いて言えば真夏の竹林にさやさや流れる清流。「土田さんだって、今日は早い方なんじゃないですか？ よく分からないけど」目にほんの少し、いたずらっぽさが垣間見えた。

「そ、そうですね…実は、ドジ、いや、ドジなんてもんじゃなくて、本っ当くに、虫ケラ以下の失敗しちゃって、皆に迷惑を掛けてきたばっかなんです」裕輔はマグカップに目を落とす。「ゴミ捨て場に閉じ込められちゃって…バカですよ、バカ」

「ええー！」素直に驚くだけの優子。呆れることも、笑うこともしない。ただ素直に驚くだけ。「大変でしたねえ…」そして、またマグカップに目を落とした。決して話題に詰まってという風ではなく。―あの「頑張って」メールを出したのは、あなたでしょうか…？

「本当に馬鹿なんです、僕は。仕事ができないとますます焦って気が滅入るし…何だかここ最近、悪循環で本当、サイアクです。前も体調崩して病院行っただけ」

―あ。馬鹿ますます馬鹿だ。今、じぶん、甘えてる、凄え甘えてる。優子は黙ってえくぼを少しだけ浮かべて微笑み、両手のマグカップを愛しそうに眺めたまま「…あたしも、前、心療内科に行ったことがあるんですよ」まるで、昨日歯医者に行っても行ったことを話すような気安さで切り出した。「食欲が無くなって、体重が落ちちゃって…」

“シンリョウナイカ”という突然の響き。裕輔は狼狽した。「って、何も食べなかったんですか!？」

「うん。そうそう。食べられなくなっちゃったの…」 他人事のように話すが、決している加減さはない。「ちょうど仕事が忙しい時期

で。お医者さんに訊いたら、仕事のストレスだって」なんだろう。この冷静で絶妙な、“自身”との距離感。裕輔の心に湧き上がる、妙な感動。真摯なのだが、悲壮感がない。凜とした強い芯が、言葉の裏にこもっている気がした。

―でも、その“芯”が硬すぎるような気が…。

「今はもう、平気なんですか…？」小柄ながら、そしてその齡にしては信じられないくらい引き締まった細身の身体を心配げに見つめる裕輔。

「うん。大丈夫ですよ。でも、仕方ないですよ。仕事してるんだもん。少しくらいのストレスは」艶めかしい目尻が、ますます愛らしく下がる。作り笑いでは、決して出せない自然なカーブ。

「まあ…そうですね…仕事してる以上、ついて回りますもんね」最後はかすれるような裕輔の声。「ストレス」

―あちゃー。凄えコノ人。強え。ますます好きだ。

「そ。結局世の中って、仕事しなければ食べていけない訳だし」優子は表通りを見ながらカップを小さな口に持ってくる。「ストレスとは、上手に付き合っていかなきゃ」その言葉には弱気さもなく、ニヒルさもなければ気負いもない。

―達観してる。悟ってる。

「とにかく身体には…気をつけてください…」裕輔にはそれだけを言うのが精一杯だった。手にはじっとりと汗。

―何ができる…自分には何ができるんだろ…？

何もない。彼女は完全に自立していた。それはもう、頑なで堅牢な城砦にさえ思えた。不意に、大学の頃英語の授業に出てきた、self containedという言葉が過ぎる。ろくに勉強はしなかったが、この言葉だけは覚えていた。「【形】？（機械などが）自給自足式の、自己充足の？（人が）自制的な、沈着な、独立した？（人が）無口な、打ち解けない」彼女はself containedだと思った。？の意味もあるが、むしろ？の意味の方が勝ってる、self contained…。

それから暫くして二人はスタバを出た。優子とターミナル駅で別れ、裕輔は下宿へ戻った。

雨音の夕べ、裕輔の頭には優子の言葉が響く。

「…世の中って、仕事しなければ食べていけない訳だし…」

同時に、社長や住吉の叱咤も生々しく再現され、裕輔の脳皮をヒリヒリ擦る。

「んもう、自分で作ったものの責任さえも取れないの？ あんたは」住吉の脂ぎった顔が浮かぶ。

「分かってるわい。畜生っタレ」不意に虚空に吼え、腕をぶんぶん振り回すと、手に昨日のミスプリントが当たった。寝転がったまま用紙を開く。

「エ＊P “ エエエエ&&&&エエエエ#####! GF>TF
LJD0」

自分でも「これは相当ヤバイ」と思いつつも、シュレッダーにかけられる寸前のものを拾ってきてしまったのだ。

「…今回は随分とまた、煮えくり返ったというか、血走った文章だな」

烈しく支離滅裂な文章を眺めるうちに裕輔の視界はクラクラしてきたが、同時に痺れるようなひらめきが走る。これは…

「換字式暗号」だ。裕輔は咄嗟に思った。しかも「JIS配列だ」。日本語のかな文字を、キーボードで打つときのキーに置き換え、またアルファベットや数字は逆にキーボード上でそのキーの上に書かれているかな文字を置き換えることとする。すると、「5けせふ5555おおお5555ああああ(ぬ) きはるへかはりましを」
:「GO(×4) おー!(×4) GO(×4) あー!(雄叫び?) (×4) 気張るべ(きはるへ)、頑張りましょう(かはりましを)」

「これだ!」裕輔は躍り上がった。「うほほほほ!うほほほほ!」優子さんだ、彼女がメッセージを打ってるんだ。夜中の1時、裕輔

は嬉しさの余り躍り上がる。「ひひひひ！おれだけだ！おれだけへのメッセージだ！」

雨の中。通夜は日曜日に行われた。では、香川と、死んだ友人のバンドのメンバーが先に来ていた。

焼香が行われる間も、友人の最期の様子が話題に上がっていた。

「凄かったらしいな…」

「何が？」

「最期の苦しみようだよ」

「そんなに苦しいのか！？」

「ああ…だって、まだ若いだろう？ 癌細胞の働きも恐ろしく活発で、あっという間に全身に広がったらしいぜ。発見された時には、末期だって」

「あいつ、タバコ、凄かったもんな」

「肺…か？」

「ああ。最初は…“原発部位”っていうらしいんだけど、最初は肺癌だったらしい。3ヶ月位前に、疲れやすくて息が直ぐに上がるし、『背中が痛エ』ってことで病院に行ったんだ。そしたら、肺はもちろん、すでに胃や腰の骨なんかに癌細胞が巣食ってて」

「うへえ」

「その前にもあいつ、痰によく血が混じってたんだよ。『ヘーキ、ヘーキ』なんて言ってたけどアン時、無理にでも病院に行かせてればな」

「最期は、痛みで獣のようになってたよ…」

「俺たちのことももう誰だか分かんなくてさ」

「見なけりゃ良かったな…」一人が涙ぐんだ。

「ああ…」もう一人が空を見上げる。

裕輔と香川は読経の流れる中、ただ放心したように聞き入っていた。今までテレビや新聞の世界のものでしかなかった死の病が、直近の、生身の友人を襲ったのだ。

鉛色の雲が、裕輔の上に重くのしかかって来る。得体の知れない不安定なものが、裕輔の心の奥底に、墨汁のように滲んでくる。

「ちょっと、ゴメン…」気分が悪くなり、裕輔はトイレへ駆け込んだ。

帰りに、バンドのメンバーが、「形見分けだ」と言って、両親から託されていた大量のCDを持ち出した。

小学生の頃からのロック好きで、CDは優に2、3、000枚はあるとのことだった。QueenやBeatles、Deep PurpleにBostonなど、裕輔でも名前を見たことのあるタイトルも並ぶ。

「好きなだけ持ってってくれ…残ったのを、おれたちバンドのものにするから」

「おお…まあ、良く分からないけど、少し貰ってくよ」香川がつぶやいた。「裕輔、お前も取れや」

「おれは、いいよ」気分の悪かった裕輔は、口を押さえながら首を振った。「余り、洋楽知らないし」

「辛気くせえこと言ってんじゃねえよ」バンド・メンバーの一人が、笑って、段ボールの内の一枚を無造作に取り出した。「一枚だけでも、持って帰ってやってくれ。あいつのためだ」

「分かったよ…」手にした一枚は、Todd Rundgrenというアーティストのものであった。後で調べたところ、アルバムのタイトルは『The Ever Popular Tortured Artist's Effect』となっていた。

もちろん彼のことを裕輔は全く知らなかった。奇妙なアーティストだと思った。ジャケットには、馬面のアーティスト本人と思われる、後ろ手に腕を回した半身写真がある。真っ青の背景の前に、黒いスーツにサングラスで立っている。

帰った夜、裕輔の頭の中では香川らとの会話が際限なく繰り返され

ていた。ネットで調べると、あるわあるわ、ブログ闘病記が山のようにある。胃癌、大腸癌、肺癌、乳癌、白血病、悪性リンパ腫：諸々の癌との格闘が、あるものは非常に生真面目に、あるものは多少おちゃらけて軽妙に、様々な文体で書かれてある。

2004年に胃癌に見舞われた、明るく前向きな主婦の日記は、途中で書き込みがなくなり、そのままになっていた。悪性リンパ腫のOLの日記は、家族による「本人は、2004年x月x日に永眠いたしました」というシンプルな文章で締められていた。

裕輔は、胃をさする。

—そう言えば最近、シクシクと痛む…。異物感があるような気がする…。

考え始めると、余計に気になり、病気のことしか頭を過ぎらなくなる。

—空腹時に酒を飲むよな。ああ、仕事のストレスと同時にコーヒーもよく飲んだっけ。あれって、身体に凄く良くないんだなあ…。次第に、滲み出した不安感が心を満たすまでになり、グルグルと攪拌し出す。頭に血が昇る。裕輔の頭は、次第にパニックってきた。

「おいおい、これって…癌の兆候バツチリじゃ…」画面を眺めつつ、裕輔の手のひらと額には、知らず脂汗が滲む。その晩、裕輔は不治の病を宣告される夢を何度も見、汗だくになってほとんど眠れなかった。

翌朝、裕輔は午前中有給を取り、会社近くの病院へ駆け込んだ。

「ストレス性胃炎じゃ、ないのかなあ…」若禿げで精気の無い内科医は、裕輔の胃を触診した後、オドオド呟いた。

「でも、何だか異物感があって…」

「普通、異物感なんて感じないもんなんだけどなあ…」ボールペンの尻で側頭をポリポリやる。「だって、体重減ってないし、食欲もあるんでしょ？」

「ま、そりゃ、今のところは、まあ…」若干、言葉に詰まる。「で

も、でも、これから症状が出て来るのかも…」

「血便は？」

「無いです。今のところ」

「まあ、念のため、明日レントゲン撮りますから、今夜は絶食してください」

「レントゲンじゃ、分からないでしょ！？」裕輔は叫んだ。「レントゲンでただの胃潰瘍だなんて言われて、見落とされた癌が沢山あることは、知ってるんです！」

「でも、あなたねえ…」

「胃カメラです！ 胃カメラにしてください！」

裕輔の気迫に気おされた形となり、若禿げ内科医は3日後に消化器科の予約を入れさせられる羽目となった。

会社に戻りメールを開けると、来ている来ている、ウィルス・メールに文字化けスパム。

ア濡・ <ア、一＊デア篠ホタ・タファイヲ
ア、一トヨカ・栞ヤ 9,000ソ・！！

「デア」…？ 「ホタ」…！？

―何だと…！？

裕輔の心に、不意にムカムカしたものがこみ上げてきた。Just・響きが好きじゃない。

「畜生、馬鹿にしやがって…」

「何をやってんのよう！」住吉の神経質なソプラノが響く。矢作が住吉の前に立ち、うなだれている。「あんたって人は…こんなこともできないようじゃ、本当に、“役立たず”よ！」

「スミマセン…」矢作の声が湿ってきた。涙を必死に堪えている様子。

住吉は猜疑心の塊のような目を、時折課員一人一人に向けながらネ

チネチ喋っている。裕輔は慌てて目を逸らす。目が合うと、瞬間、胃が痛むからだ。

山本聡子は下を向いたままだが、笑いを堪えている。日ごろから、陰で矢作を「役立たず」呼ばわりしてることは、裕輔も知っている。「僕も、厄介者みたいに呼ばれてんだろうな…」裕輔は脱力する。――会社の癌。

突如背筋に走る、いたたまれない寂寞感。

矢作が戻ってきた。パソコンに向かったまま、微動だにしない。

「矢作、ねえ、矢作くん…」呼んでも、返事がない。「ねえ…」

「アア!？」矢作は元々三白眼の真っ赤な目をますます険しくさせ、裕輔を見上げる。

「ま…また悪いんだけど」裕輔は遠慮がちに切り出した。「この文
字化けメール、見て欲しいんだけどさ…ホラ、矢作くん、以前も、
きちんと読めるように日本語に直してくれたじゃない？」

「…自分でコード変換は試してみたのかよ」恐ろしい目つきになる。
「わ…わかったわかった、やってみるよ」矢作の態度に多少辟易し、
裕輔はエンコードを試みる。「え…と…『中国語』…かな…?」

嘘呪・玉筋、一＊摺棒篠輔馬。鹿吐瘦衰

空、一空脳・朧犯 9,000失女女

な、なんと…「嘘」に「呪」い。「玉筋」「棒」を「摺る」!?!?
何だこりゃ、イヤラシイ。「輔」…おれのことか!?!「馬」「鹿」
!?! おれが「馬鹿」だと!?! 「吐く」「痩せる」「衰える」!
? …おれのことを言ってるやがる。「空^{から}」の「脳」!?! おれの
頭がヌケミソだって言いたいのか!?! しかも「9000」人の「
女」を「失う」! 裕輔の頭にだんだん血が昇る。

「何だオイ」矢作が他の入力作業の合間、裕輔の興奮状態に気づいた。「できたのか?」

「あ…ああ…でも、中国語になっちゃったみたい」痛む頭を押さえ、

辛うじて矢作を招き寄せる。

「ば、馬鹿。中国語じゃねえよ、これは。韓国語にすんだよ」

矢作はノロノロと立ち上がると、裕輔のパソコン上で文字コードを変換した。

途端、韓国語に変わる。

$\frac{1}{2}$
 $\frac{1}{3}$
 $\frac{1}{4}$
 $\frac{1}{5}$
 $\frac{1}{6}$
 $\frac{1}{7}$
 $\frac{1}{8}$
 $\frac{1}{9}$
 $\frac{1}{10}$
 $\frac{1}{11}$
 $\frac{1}{12}$
 $\frac{1}{13}$
 $\frac{1}{14}$
 $\frac{1}{15}$
 $\frac{1}{16}$
 $\frac{1}{17}$
 $\frac{1}{18}$
 $\frac{1}{19}$
 $\frac{1}{20}$
 $\frac{1}{21}$
 $\frac{1}{22}$
 $\frac{1}{23}$
 $\frac{1}{24}$
 $\frac{1}{25}$
 $\frac{1}{26}$
 $\frac{1}{27}$
 $\frac{1}{28}$
 $\frac{1}{29}$
 $\frac{1}{30}$
 $\frac{1}{31}$
 $\frac{1}{32}$
 $\frac{1}{33}$
 $\frac{1}{34}$
 $\frac{1}{35}$
 $\frac{1}{36}$
 $\frac{1}{37}$
 $\frac{1}{38}$
 $\frac{1}{39}$
 $\frac{1}{40}$
 $\frac{1}{41}$
 $\frac{1}{42}$
 $\frac{1}{43}$
 $\frac{1}{44}$
 $\frac{1}{45}$
 $\frac{1}{46}$
 $\frac{1}{47}$
 $\frac{1}{48}$
 $\frac{1}{49}$
 $\frac{1}{50}$
 $\frac{1}{51}$
 $\frac{1}{52}$
 $\frac{1}{53}$
 $\frac{1}{54}$
 $\frac{1}{55}$
 $\frac{1}{56}$
 $\frac{1}{57}$
 $\frac{1}{58}$
 $\frac{1}{59}$
 $\frac{1}{60}$
 $\frac{1}{61}$
 $\frac{1}{62}$
 $\frac{1}{63}$
 $\frac{1}{64}$
 $\frac{1}{65}$
 $\frac{1}{66}$
 $\frac{1}{67}$
 $\frac{1}{68}$
 $\frac{1}{69}$
 $\frac{1}{70}$
 $\frac{1}{71}$
 $\frac{1}{72}$
 $\frac{1}{73}$
 $\frac{1}{74}$
 $\frac{1}{75}$
 $\frac{1}{76}$
 $\frac{1}{77}$
 $\frac{1}{78}$
 $\frac{1}{79}$
 $\frac{1}{80}$
 $\frac{1}{81}$
 $\frac{1}{82}$
 $\frac{1}{83}$
 $\frac{1}{84}$
 $\frac{1}{85}$
 $\frac{1}{86}$
 $\frac{1}{87}$
 $\frac{1}{88}$
 $\frac{1}{89}$
 $\frac{1}{90}$
 $\frac{1}{91}$
 $\frac{1}{92}$
 $\frac{1}{93}$
 $\frac{1}{94}$
 $\frac{1}{95}$
 $\frac{1}{96}$
 $\frac{1}{97}$
 $\frac{1}{98}$
 $\frac{1}{99}$
 $\frac{1}{100}$

??
?
!
?
?
?
?
?
?

$\mathcal{C}_1$ $\mathcal{C}_2$ $\mathcal{C}_3$ $\mathcal{C}_4$ $\mathcal{C}_5$ $\mathcal{C}_6$ $\mathcal{C}_7$ $\mathcal{C}_8$

.....

「…ホウ」得意そうに、矢作は鼻を吸る。「やっぱ、韓国語だったろ」

「おお！」裕輔は、心が一気に晴れるような気がした。「ありがとう。凄いネ矢作クン…韓国語、分かるんだ？」

「いや」矢作は虚ろに首を振る。「分からん」

「じゃ、この意味は…？」

「知らん」

「……」裕輔は言葉を失う。

—それじゃ結局、何も分らないまま……！？

—何だ！？
この意味は？
何て言ってるんだ？

気になって仕方がない。

—また僕の悪口を言ってるんじゃないだろうな……!?

頭の中がザワザワしてきた。

「ごめんください…」

そこへ、麗しい声。振り返ると、果たして野宮さん。

「はっ、のっ、野宮さんっ…」裕輔の心が切ない思いで満たされる。

「あー、こっち、こっち」鈴木が、デスクから手を振る。「ごめんね、わざわざ……」

「いや、いいんです…」 優子が微笑む。

「あ、土田も、ちょっとこっち来て…」

突然のことにキョトンとし、言われるがままについて行く裕輔。3人は小さな会議室に入る。鈴木は、すぐに切り出した。

「野宮さんには先般お話してあるんだけど…」チラ、裕輔を見た。

「土田、お前に、野宮さんを手伝ってあげて欲しいんだ」

「えっ、て、ば、ぼ僕がいやあたしが：×○s f j l △ d ! ; ◎ 髑」
裕輔の舌がパニクる。「な何をすればいいんで!？」

優子が笑う。

「バーカ」鈴木もひとしきり笑ってから、説明する。

今回、会社に新部門をひとつつくることになったがあまり予算がない。そのために、今までの経費全体の見直しが必要となり、経理部は、現行全部門の経費見直しの任を与えられることとなった。優子は総務部の担当を割り振られ、旧知の鈴木に、何でも聞ける担当を紹介して欲しい、ときた訳である。

「よろしくお願いします」部屋を出る時、優子はペコリ、頭を下げた。

「こ、こちらこそ…」手と額に、じっとり汗が滲む。「へましないように、頑張ります」

優子は八重歯を見せて微笑み、踵を返して廊下へ向かう。

「しっかりやれよ」「しっか」にストレスを置き、鈴木もウインクをして去る。

その夜、興奮冷めやらぬまま、韓国語の辞書を買い、帰宅する。先日持ち帰って手付かずのままだったTodd Rundgrenのアルバムをかけながら、見よう見まねでメール内容を訳してみる。ステレオからは、馬面のアーティストによる、どこか切ないメロディ。80年代の影響を色濃く感じさせる、シンセの響き。歌詞の意味もよく理解できない。「Hide away」というタイトルとメロディだけが妙に印象に残った。

韓国語の方は、触れるのも今日が初めて。

しかし、懸命に訳してみても、

? ? ?・ <???.?! ? ? *?ー?? ? ? ? ? ! !

「?」 〓 「お」、 「?」 〓 「ま」、 「?」 〓 「へ」、 「?」 〓 「わ」、 「?」 〓 「が」 …

まで訳したところで、「き…きええー!」 裕輔は気も狂わんばかりに飛び上がった。

イミは、「お前は、ガ(ン)」

そして脇の毛布をひっかぶり、部屋の隅へ行ってガタガタ震えだした。

「お前は、ガン…会社のガン…」

「お…おお…なんてこと…。皆んなして…韓国語でも…おれを排除しよう…」 恐怖と悔しさとで、裕輔はすすり泣く。

気づくと、朝だった。泣きはらしたまま、寝てしまったらしい。

遅刻すれすれで会社へ着くと、矢作が消えていた。

定刻になっても現れず、昼近くになっても連絡もないので電話を試みると、既に解約されているとのこと。

「どうしたんだろう…」 何の気なしに矢作のパソコンを開く。

「おわっ」 裕輔は飛びのいた。

電源が入りっ放しになっていて、漢字だらけの文章が出てきたからだ。

歸園田居

少無適俗韻 性本愛邱山

誤落塵網中 一去三十年

羈鳥戀舊林 池魚思故淵

開荒南野際 守拙歸田園

裕輔の声につられ、他の課員たちも寄ってくる。

「陶淵明か…」まもなく定年の係長が呟く。

「トウエンメイ？」

「昔の中国の詩人だよ」

「へえ…何であいつ中国の詩なんか…そう言えば、一時期あいつ、三国志や水滸伝がどうのなんてわめてたな」鈴木が口をはさむ。

「『園田の居に帰る』っていう詩でさ、平たく言やあ、『もう仕事はこりごりだ。田舎へ帰りてえ、いや、帰るぞ！』ってイミ」係長が胸をそらす。

「…あいつ、よっぽど仕事がいやだったんすかね」

「さあ…」係長は首をすぼめて、席へ戻る。

「全く…陶淵明だか何だかしらないけど、非常識極まりないったらありやしない！」住吉はブツブツ言っている。

岡山さんや山本聡子は遠くから、クスクス笑っている。

岡山さんを見て、裕輔は思い出した。

「あ、岡山さん！ ちょっとお願いがあるんですけど…」

「ハイ？」チョココン、おしとやかに、真ん丸い目を開いて岡山嬢は問い返す。「何でしょう？」

「イギリスに留学経験があるって、聞いたんですけど…」

「はい…ありますけど」怪訝そうに裕輔を見る。

「ちよっと、英語で訳して欲しいものがあるんですけど…」

「ええ…そんなにお時間からなければ…」日本人形のように色白で小さい岡山さんは、相変わらずアンドロイドのように、無表情に答える。「いいですよ」

岡山嬢に昼飯をおごり、裕輔は「Hideaway」の英語歌詞を、簡単に日本語に訳してもらった。訳といっても、簡単に歌詞の大筋を説明してもらっただけだが。

en
Everybody's looking for a heav
e n o n e a r t h
—bridge2—

For the heart of your hideaway
e a v i n g r i g h t a w a y
W o n ' t y o u t e l l m e t h a t w e ' r e l
g o i n g
I w o n ' t t e l l n o b o d y w h e r e I ' m
t h i d e a w a y
W i l l y o u t a k e m e t o y o u r s e c r e
S t a n d i n g o n t h e o u t s i d e
B u t i t ' s o h s o c o l d
g h t t o h i d e
T h e r e ' r e t h i n g s y o u h a v e a r i
p r i v a c y
I ' m n o t t r y i n g t o i n v a d e y o u r
—bridge1—

In a hideaway
o b o d y s s e n u n t i l n o w
Y o u ' v e b e e n s a v i n g s o m e t h i n g n
s e c r e t t o t h e a v e r a g e e y e
Y o u ' v e g o t s o m e t h i n g t h a t ' s a
A n d w a t c h i n g w h a t y o u s a y
f a r o u n d i n a c r o w d
W a t c h i n g h o w y o u s m i l e
c e
've been watching how you'd an

—narration—
I've been trying to get a message
age through the air to you

—repeat
bridge 2—
Standing on the outside
But it's oh so cold
ve tried
You will never know until you
ret fantasy
You can trust me with your sec
—bridge 3—

It seems so far away
Don't make me wait any more
Give me your direction
n this tinkering world
I can't stand another second i
To your hideaway
tell me which way to go
Get me on your wavelength and
e through the air to me?
Are you trying to get a message
2.

When your daydreams die
together again
Someone to put the pieces back
d y gets hurt
A slice of paradise where no bo

Get on my wavelength
I'll tell you which way to go
To my hideaway

「フウ〜ん。なるほど…」

裕輔は、何故だか歌詞に共感のようなものを覚えた。

「これは…誰の歌詞なんですか…？」岡山さんは、ちょっと眉をひそめる。

「じつは僕もよく知らないんですけど、Todd…何とかっていう人の歌らしいんです。アメリカ人だったかな」

「どうしてこれを…？」岡山さんの目にかすかに好奇の光がともる。「いや、ただ、ちょっと歌詞が気になっただけなんです…」裕輔は狼狽した。自分でも本当の理由は分からないのだ。「ぼく自身、洋楽なんてよく知らないし…」

「ふうん…」岡山さんは少し微笑んで、ランチのサンドイッチを少し齧り、外へ目をやった。

「とにかく今日は…どうもありがとうございました」裕輔は何だか落ち着かなくなり、席を立つ。「もう行きましょ。遅れたら、また課長に嫌味言われちゃいますよ」

「ごちそうさまでした」岡山さんも、ぴよこんと立ち上がった。

「因みに…アルバム名にある『torture』って、どういうイミですか？」

「『拷問』、です」

次の日、午前中半休を取り、先日胃カメラの結果を聞きに行く。結果は、特に何も発見されず。

「そ、そんなことはないんじゃない…？」

「あんたねえ…」先日とは違う、ヒゲ面で年配の消化器専門医は、眼鏡を取るとそれを拭きながら言う。「自分で、病気、つくり出そうとしてない？」

「そんなこと…」

バン！医者は乱暴に胃の写真を叩く。

「物理的にねえ…あんたの胃、異常が見当たらない訳！ 悪いけど、他に便の潜血検査もやって、それも異常なしというんじゃない？」

「それじゃ、どこが…」

「いるんだよなあ…キミみたいな人…」医者は、不貞腐れたように笑い、カルテに何やら書き込んでいる。もはや、裕輔を見ていない。「ちよつと医学の知識をネットで齧って『わたしは○×じゃないでしょうか！？』なんて、駆け込む“知ったかノイローゼ”」

“知ったか”…何ですって！？」

「軽いノイローゼの一種だよ。キミも、他に精神的な原因があるんじゃないのかなあ。仕事のストレスとかさ」

「ストレス…」裕輔は言葉に詰まる。

「何なら紹介しようか、心療内科でも」医者は既にニヤついている。「シンリョウナイカ！？」裕輔の頭に、すぐさま優子のことが浮かんだ。

「け、結構！」逃げるように病院を出てきたが、頭の中では優子の言葉が繰り返される。

―そ。結局世の中って、仕事しなければ食べていけない訳だし。…ストレスとは、上手に付き合っていかなきゃ。

裕輔は改めて思う。

―優子さん…あんたは、エライ！

社に戻ると、鈴木がニヤニヤしながら裕輔に言った。

「四宮嬢が、お待ちかねだぞ」

会議室に滑り込むと、既に優子がいて、テーブルに積まれた書類の山を整理している。「ごめんなさい。このコピー機関連の経費申請書、今朝、急に課長から『今週中に』って言われて…」

「え？ あと3週間は大丈夫のはずじゃ…？」

「それが、以前、大々的に○×ノートの販促イベントした時の経費

も調べなきゃいけないことになっちゃったんです…」

「でも、あれって営業部の仕事だから、野宮さんの担当じゃないんじゃない…?」

「うちの課長、営業部の課長に押し切られちゃっみたいで…」優子はわずかに笑う。「『あの時、ポスターや機材を実際に製作したのは総務部だから』って」八重歯がのぞく。

「何てことだ…」裕輔も、席に座り、大げさにお手上げのポーズを取ってみせる。

「うちの課長、いい人なんだけど、そういうところ、弱いから」目尻が下がる。赤ボールペンを握った手だけは、しっかりと書類上をチエックする。「休む暇も、なくなっちゃいますよねえ…」

「ええ…」裕輔は、優子に訊かれた箇所の明細、用途などをもう一度思い出し、教えてあげる。

ひと段落したところで、裕輔はさり気なく訊いてみた。

「さっき、休みって言ってましたね…」後から思うと、この時の裕輔は、自分でも驚くほど明るくしゃべっていた。「休みの日は、何して過ごしてるんですか…」

「え? 何って、趣味とか…ってことですか!?’」優子が顔をあげる。

「いや、その、そうなんですけど。趣味とか…ホラ、前、ストレスの話とかしたじゃないですか。ストレス解消とかって、何してるのかな、なんて」自分でも耳が熱いのが分かる。

「そうねえ…」優子は、ボールペンをあごに当てて、上を見つめた。わざとらしさが無い。「特に…ないわね。ぼーっとしてるの、意外と」うふふ、伸びをするような姿勢になり、笑った。裕輔を真っ直ぐ見つめている。「土田さんは、何してるんですか?」

「僕は…映画を観にいたり…ですかね」

「私も、たまに映画観ますよ」

「ホント!? 何観ます!?’」

「私? ……シヨーン・コネリーとかクリント・イーストウッドが出

てるものとかは、よく観たけど…特にジャンルとかは…」

「意外とオヤジ好みなんですか」

「うん…そうかも。『おれが何でもしてあげるよ』的なところがないのかも…わたし、ものぐさだから！」優子は意外なほどあっけらかんと、無邪気にえへへ、と笑う。

「若いのは…」裕輔は唾を飲み込んだ。「僕みたいに若いのは、駄目っすか…？」意外にも素直に言葉が出てきた。自分でも、よくもあっけらかんとした声だな、と感じていた。

「ええー！」特に困惑するでもなかったが、優子は思い切り目尻を下げて裕輔を見つめ返す。「土田さんみたいに…？」

「ええ。たとえば…たとえばですよ、」ここへ来て、初めて眼が泳ぐ。「僕と、映画だなんて…になったら…行く気は…」

「あちゃー、言っちゃったよ、おい。」

「土田さんですかあー！ ええー…」優子の作業の手が止まった。0.5秒だけ、下を向き、またあっけらかんと、いつもの達観した笑顔。「私みたいなオバサンなんかより、もっとお若い方に行ったらどうですか？」

「はうっ！」裕輔は狼狽したが、更に食い下がった。「いや、僕は、その、四宮さん！ あなた、この、美しいのに…もう、あなただから、あなただから…あなただからいいんであて…」下を向いてしまった。

「でも…」優子の声が、途端に冷静になる。下を向く。「あたし、本当に、相応しくくないですから」既にボールペンがきばきと書面の上を走っている。自分が年上だということを遠慮して誘いを待っているような、そんな口ぶりでは決してなかった。

「…そ、そうっすかねえー！」止めを刺される5秒前。もう、リング隅に追い込まれてヨレヨレ。でも後で思い返すと、よくこの時、あんな明るい声が出せたか。

「いくらでも、いるじゃないですかあー。若い娘なんて」あの、無垢で達観した笑顔。なのに、既に裕輔の食い込む余地は全くないオ

ーラが出ている。

ーいねえよ。

「はは…」マットに沈んだ。既に仕事モードに戻った優子を前に、裕輔は逆に全く仕事に集中できなくなった。

ーどうしてそんなに、冷静でいられるのかなあ!? あなたは…。

帰りの電車中でも、仲睦まじいカップルを見て、不意にイライラする。

ークソ。“中野独人”でさえ、もっと上手く立ち回ってるのに。おれは電車男以下だ。

家に帰り、裕輔は何も考えずにTodd Rundgrenをかける。「Hideaway」の独特のシンセとベースのハーモニーがフェイド・インしてくる。

Toddのどこことなく切ない歌声を聴いているうちに、裕輔の目に涙が溜まってきた。優子への思いは断ちがたい。

You've got something that's a secret to the average eye

ーあなたの心には、確かに秘密がある。

In a hideaway

「どうしてだ。過去に男とのトラブルがあって、それがトラウマになってとか…」裕輔は仰向けのまま、傍の毛布を握り締める。

I'm not trying to invade your privacy

ーそう、僕は別に、あなたの心の奥底まで踏み込もうなんて思っちゃいない。

There're things you have a right

h t t o h i d e

―あなたには当然、秘密を隠す権利はある、ありすぎ。

B u t i t ' s o h s o c o l d

S t a n d i n g o n t h e o u t s i d e

―でも、でも…このままだと本当に、とっても“寒い”んだよなあ。

W i l l y o u t a k e m e t o y o u r s e c r e
t h i d e a w a y

I w o n ' t t e l l n o b o d y w h e r e I ' m
g o i n g

W o n ' t y o u t e l l m e t h a t w e ' r e l
e a v i n g r i g h t a w a y

F o r t h e h e a r t o f y o u r h i d e a w a y

―そう、誰にも言わないからさ、少しだけでも、教えてください。

「はぁ、あ、“Milk tea”って、四宮さん、あんたじゃなかつたの!？」

欠伸をしながら、知らず叫んだ。

そして、突如起き上がった。

「じゃケツキヨク、いったい、誰……?」

手元には、やはり散らかり放題の“宇宙からの交信”プリントが無数にある。“電波系”という言葉が頭をよぎる。

―いつもいつも、これ、誰からのメッセージなんだろう…?

B 9 0 B (0 { 4 C Y ∥ F H ∥ B 9 0 B (0 { 4 C Y ∥ F H ∥ B 9
0 B (0 { 4 C Y < F H ∥ B ∴ O B * 0 { 4 C Y < F H ∥ B ; O B
+ 0 { 4 C Y < F H ∥ B ; O B + 0 { 4 C Y < F H ∥ B ; O B + 0 {
4 C W ? E z 8 F 4 0 0 K < F \$ 0 0 K , (z ∥ C X 0 E t 4 F @
> * 0 T 1 m 1 n 2 o 1 * 0 4 0 A @ 8 E y 2 1 ? * 1 * 0 4 0 A

E; Ey21\$H*1*040AJ? Ey210 “1リxfハR—
+Oヒ×|秒O「!シューソ@DC!D?sチ■xヒヒタEEアチ
リhEッー@!ヒ|—Fノ時7!チ+クス■!!!!!” ●ウ↑w
w年Jソ秒トF%7リマ:

始めは整然と並んでいた文字群が、徐々に理性を失い錯乱してゆく印象を与える。

紙を見つめるうち、裕輔は、頭の中が次第にザワザワして来るのを感じた。

「『B90B』が、換字式だとして、JISに直すと『こよゆこよ』:」裕輔は知らず、“解読作業”に取り掛かっていた。「『こよゆこよ』:『故余湯子夜』? 『子よ、行こうよ』? 『小余裕雇用』? んん:~:」早速、行き詰まる。「となると、違う方法だ:DESではない? RSA? ナップ・サックか? ハッシュ関数を通して:いや、もっと原始的な:そう、プリンタか発信元PCに、エニグマが仕組まれているんだ:いや、そんな機能があったか?」

昔、趣味で見聞きし齧った知識だけを頼りに色々と試みてみるが、一向に規則性が見出せない。分からない。当たり前である。

Are you trying to get a message
through the air to me?

「うおお! 優子さん、あなたからのメッセージなら、何かヒントを、ヒントをください!」

ノックの音がした。

「ちよつと、大丈夫!」

夜中だというのに騒がしく唸る裕輔に、気味悪く思った隣の住民が部屋をノックする。「大丈夫」、とだけ叫び、再び紙にボールペンを走らせる。周囲は不気味な“乱数表”のコピーが散乱し、それに埋め尽くされている。今や裕輔の部屋は、偏執的熱気に支配され

ていた。

「分からない、分からないよお…」裕輔の眼から、涙がとめどなく流れ落ちる。紙をくしゃくしゃに握り潰しては引き裂いて放り投げる。とうとう一睡もできず、朝を迎えた。

Get me on your wavelength and
tell me which way to go
To your hideaway
一分かりません、あなたのHideawayまでの行き方が分かりません。

出勤時刻になったので、泣きはらした顔のまま、裕輔はスーツに着替え、電車に乗る。その間もあの表を見ながらブツブツ呟く。「あと一步、あと一步なんだよなあ…」

携帯MP3からは、「Hideaway」が流れ続ける。

Everybody's looking for a heav
en on earth
A slice of paradise where nobo
dy gets hurt

―この世に、楽園なんてあるのかねえ…。

見回すと、朝のラッシュ時。疲れた顔、顔、顔。皆、殺気立っているようにも見える。

隣では大学生らしき男が、必死にメールを打っている。少し離れたところでは、自分と同世代くらいのスーツ姿の男が、同じく携帯を見つめているし、更にその隣の女子高生の集団は、互いに携帯をいじり合っている。髭の剃り残しの青いサラリーマンたち、OL、スポーツ新聞を読みながら船を漕ぐ老紳士…そんな顔を見回していた、その瞬間、

ブウ…ブウ…ウ…ン…

蜂の羽音のような大きな雑音がヘッドフォンから聞こえてきた。

「うわっ！」裕輔はのけぞり、思わずヘッドフォンをコードごと引きはがした。

周囲の乗客は、奇異の目で裕輔を見、すぐに自分の世界へ戻る。

「う…わあ…びっくり、したあ…」周囲の反応に気づき、裕輔は小声で喘ぎながら呟く。そして、乗客のほとんどが携帯を片手にしている事実に気づき、愕然とした。

―電波だ！ やっぱり、誰かが俺に、電波を送ってきてる。ひよつとしたら、四宮さんかもしれないし…。

裕輔は、途端に不安に駆られ、気分が悪くなった。

「ちょ、ちょっと、ごめんなさい…」途中駅だというのに、一度下車してしまった。

定刻ギリギリに会社に着いた頃、雨が降り出した。

エレベーターの中、岡山さんに出会う。

「土田さん…眼が真っ赤！ 顔も真っ青ですよ！？」眼を見開き、頓狂な声を上げる。「大丈夫ですか？」

「え…まあ…」ギラギラ眼だけを光らせ、岡山さんの手元を見る。ドトールの持ち帰り容器が可愛く両腕に収まっている。そこからは、微かに紅茶系の匂い…。

「あれ！？」裕輔が口を開こうとした途端、エレベーターのドアが開いた。

目の前に、住吉が立っている。

「お、お早うゴザイます…」胃が縮む思いで、挨拶をする。

「土田クン…今日、何の日か、知ってる？」開口一番、乗り込む前に住吉は言った。

「い…いえ」俯く裕輔。

「はあ…ア…まったく」住吉は上を向き、肩をそびやかす。「社長がおっしゃってたでしょ！？」 鴻池商事の資材部の方、部長さんが

お見えになるの！」

「はア……」

「『はア』ってねえ……あんた……しっかりしろよ。まあいいわ。さっき、メールで、以前社長がお書きになった『日本のノート文具の明日』っていうレポートを、あんたのアドレスに添付で送つていたから。それをプリント・アウトして、3部、冊子の形につくっておいて。結構ページ数があるの。ま、簡単な仕事だから、あなたに任せるよ。10時にはお見えになるから、絶対にそれまでに用意してくるんだよ！」一氣にまくし立てると、さっさとエレベータに乗って、恐らく社長のもとへであろうが、行ってしまった。

「手伝い、ましようか……？」岡山さんが心配そうに見上げる。

「いえ、いいっす……」裕輔の頭の中は、それどころではない。

「何だ！？ 暗号を解く鍵は、何だ！？」

席に着き、例の紙を眺めながらふと視線を上げる。時計が掛かっている。

「そうか！」裕輔の頭に、いつもの電撃が走った。

「換字式、それも、かなり原始的なものだ。」

「こんな、こんな単純な……」裕輔はニヤニヤしながら、時計に歩み寄る。

「『円盤式換字暗号器』、時計を利用すれば良かったのか……」

裕輔が椅子を踏み台にして時計を外した時、鈴木が気づいた。

「おい、何やってんだ」

「いえ、単純なもんだったんですよ。鈴木さん。もう大丈夫です。ばくにだって出来ますよ。まさか、円盤式とは……」

「は？ お前、何言ってるんだ？」鈴木が立ち上がる。

皆も気づく。構わず、裕輔は時計を外し、今は居ない矢作の机に直径50センチはあろうかという置時計の蓋を取り払い、プリント片手にダイヤルを勝手に回し始めた。更に、マジックを机から拝借すると、文字盤の時刻を表す数字の上に、1には「あ」、2には「い」、3には「う」というように、“対応文字”を書き始めた。

「え…と…一巡するから、1には今度は『す』が来て…」

「お…おい…やめろよ。何やってんだよ！」鈴木が走り寄って来て、雄介からマジックを取り上げた。

「あ…」一瞬、マジックを求め、手が虚空を泳ぐ。そしてボーッと鈴木顔を上げた。

「やだあ…イミ分かんない…」山本聡子が、小さく叫んぶ。

「ど、どうして…」裕輔は不満を顕わにした。

「お前…自分でやってること、分かってんのか!? どうしちまっただよ!？」

「…」裕輔は、何故怒るのか理解しかねるような目で、鈴木を見る。「もういい。しばらくそこに座って、頭冷やしてろ」

「今日は、帰った方が…矢作くんの例もあるし」係長が心配そうに出てくる。

「そうっすよねえ…おい、土田、お前、最近疲れてんだよ」鈴木が裕輔に向き直った時、

「土田クン…さっきのものの、もう準備できた!?」住吉が、いそいそと上階から降りてきた。

「いいえ、こ、これから…」

「早く! もう、お着きな!」住吉も明らかに興奮している。「資材部長さんが!」

「ええっ!？」さすがに裕輔はあせった。気が動転して、何が何だか分からない。確かに、先ほどの時計は既に9時30分を過ぎていた。「わ、分かりました。今すぐ出します…」

「んっもう、早くしてくれよ!」

裕輔はメールと開き、添付ファイルのワードを開く。
すかさず文書「印刷」コマンドのボタンを押す。

「エラー」

の文字。

「亜j1sfぢ；じゃl；kdじゃ；！」裕輔の頭が、ザワザワ、フワフワしてきた。

そして、プリンタからは、容赦なく“宇宙からの交信”文書がところ構わず、ジャンジャン出始めた！

B90B(0)4CY||FH||B90B(0)4CY||FH||B
90B(0)4CY<FH||B..OB*0)4CY<FH||B;O
B+0)4CY<FH||B;OB+0)4CY<FH||B;OB+
0)4CW?Ez8F400K<F\$00K,)z||CX0Et4
F@>*0T1m1n2o1*040A@8Ey21?*1*04
0AE;Ey21\$H*1*040AJ?Ey210“1リxfハ
R一十Oヒ×|秒O「!シーウソ@DC!D?sチ■xヒヒタEE
アチリhEツー@!ヒ|—Fノ時7!チ+クス■!!!!!!!”●ウ
↑ww年Jソ秒トF%7リマ…

「いやだあ、キモチ悪い！」山本聡子が眉をしかめる。「また、止らないわあ」

「あ、あわわわ…あわああああ…」

―来た。また来た。大量に来た。処理が、処理が追いつかんど、どうする…どうする…!?

「ちよっとお！ どうすんのよ！」住吉が、泣きそうに声を絞り、時計を見る。「もう、もう間もなくおふた方がお見えなのにつ！」

「その…あわわ…今、どうして…やって…このそれを」

―畜生、どうせおれは、どうせおれは…!

規則性のない文字たちが、裕輔の目に、再び怪しく光り出した。

「ガン」「お前は癌」「会社のガン」「ガンは直ちに切除されねばならぬ」

「ぼくか？ 誰？ あなたは誰？ 優子さん！？ そんな…。
世界が激しく動揺した。

「そんな…ぼくは、違う…」裕輔の目の前が、真っ赤になる。
フロア入り口のエレベーターが鳴った。課員の皆が注視する中、ドアが開き、社長と鴻池商事の資材部長がにこやかに話しをしながら出て来た。

「…それでは、私の以前書きました拙稿を、こちらの課の住吉が持っておりますので、お目汚しではございますが…」急に鋭い目になり、住吉と裕輔へ向き直る。「おい、例の原稿！」手を伸ばす。

「ハッ！ た、ただいま」住吉は、親の敵を見る如きもの凄い目で、裕輔を肘で突いた。

プリンタは、実に済ました“顔”で、意味もない紙片を吐き出し続ける。

裕輔は、血走った眼をプリンタに向けた。

「切除されるべきは、お前だ…何者か知らんが…」

「お前の方だ…」

「へ！？」住吉が、振り向く。

すかさず、裕輔は脇にあったキャスター付の椅子を持ち上げた。

「…！」社長、住吉、鴻池商事の資材部長、岡山さん、鈴木、山本聡子、係長…皆が哑然として声も出ない中、裕輔は吼える。

「お前の方だ…！」

住吉と社長が反射的に両手を挙げ、

「ひっ」

「をわ」顔を背けた。

そして裕輔は、椅子をプリンタ目がけて、一気に振り下ろした。

（後書き）

2005年5月に書いた作品です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8311q/>

Hideaway

2011年2月22日20時48分発行